

◆ストックマネジメント計画比較表（下水道）

	ケース 1：標準耐用年数で改築		ケース 2：最適シナリオ	
	ポンプ場施設	管路施設	ポンプ場施設	管路施設
主な施設	<ul style="list-style-type: none"> ・大山崎汚水中継ポンプ場（資産数 60） ・大山崎排水ポンプ場 A 棟、B 棟（資産数 168） ・下植野排水ポンプ場（資産数 120） ・西高田マンホール形式ポンプ場（資産数 4） ・竜光マンホール形式ポンプ場（資産数 4） ・鑑田東部マンホール形式ポンプ場（資産数 4） ・総管路延長：約 57km 			
改築ペース	標準耐用年数：7～50 年	標準耐用年数：50 年	目標耐用年数：標準耐用年数×係数※ ※各施設における実際の改築実績等に基づき設定（1.0～3.0）	年間投資額：1.5 億円/年
健全度 (リスク)	○	○	△	△
	・健全度は高い。		・ケース 1 よりも健全度の低い資産が増加する。	
経済性 (投資平準化)	× 3.62 億円/年 (180.8 億円/50 年累計)	× 1.92 億円/年 (96.2 億円/50 年累計)	○ 1.47 億円/年 (73.29 億円/50 年累計)	○ 1.47 億円/年 (73.49 億円/50 年累計)
	<ul style="list-style-type: none"> ・年間約 5.5 億円の投資が必要。 ・投資額が増大し、10 億円を超える年度もある。 ・毎年の投資額に増減があり、平準化ができていない。 		<ul style="list-style-type: none"> ・年間約 3.0 億円の投資が必要。 ・ケース 1 よりも投資額を抑制し平準化できている。 	
まとめ	<ul style="list-style-type: none"> ・ケース 1 について、健全度は高いが投資額が大幅に増大し現実的ではない。 ・ケース 2 について、ケース 1 よりも健全度の低い資産は増加するが、優先的に改築修繕等の対策を実施し、健全度を維持していくことが必要。 ・ケース 1 と比べて、ケース 2 のコスト縮減効果は年間約 2.6 億円、50 年間累計で約 130 億円が見込まれる。 ・投資額は近年のペース（約 1.0～2.0 億円）よりも増大するため、下水道使用料の見直し検討が必要。 			